

2025 年度

成城大学外部評価報告書

2026 年 2 月 24 日

成城大学外部評価委員会

1. 成城大学外部評価委員会

成城大学外部評価委員会（以下「本委員会」という。）は、「成城大学内部質保証規程」（以下「規程」という。）第 10 条に基づき、成城大学の自己点検・評価の妥当性・客観性を担保するために設置され、学外の学識経験者等の第三者により組織された外部評価を実施する機関である。規程第 11 条に基づく「成城大学外部評価規程」に規定されるように、本委員会の任務は、成城大学が実施する内部質保証及び自己点検・評価の結果について検証及び評価を行うことであるとともに、その評価を通じて成城大学の教育・研究活動及び管理運営等の改善・向上に資する提言を行うこともできるとされている。そして、その外部評価の結果をとりまとめ、学長及び内部質保証委員会に報告することとされている。

2. 2025 年度 成城大学外部評価委員会委員（任期：2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日）

委員長 工藤 潤 中央大学 法学部／教育力研究開発機構 特任教授

副委員長 鳥居 朋子 早稲田大学 大学総合研究センター 副所長

委員 武石 輝久 相模女子大学 中学部・高等部 高等部校長

委員 平野 恵子 株式会社文化放送キャリアパートナーズ就職情報研究所 所長

※肩書は、2026 年 2 月 24 日現在のものである。

3. 委員会開催日程等

本委員会は、意見交換を主体とした形式で実施することとし、成城大学内部質保証委員会がとりまとめた「2025年度 成城大学全学版自己点検・評価報告書」を確認した上で、各議題の「長所・特色」や「課題」について議論し、有意義な提言を行うことを目指した。

委員は、書面による内容確認及び検証・評価を事前に行うとともに、委員会会合では各委員が記述した「2025 年度 成城大学外部評価委員会 コメントシート」をもとに意見交換を実施した。委員会会合後、最終的な成城大学への評価結果をコメントシートに明記し、提出した。

日時：2026 年 1 月 27 日（火）13:00～15:00

場所：成城大学 3 号館 3 階 大会議室

議題：1. 成城大学提出資料に対する点検・評価について

(1) 大学基準 基準 2 内部質保証体制

(2) 大学基準 基準 4 教育・学習

(3) 大学基準 基準 5 入学者選抜

2. 成城大学の学生参画に関する意見交換（大学基準 基準 7 学生支援）

3. 「外部評価報告書」の作成について

4. その他

4. 評価結果

<概評>

この度、成城大学から依頼された外部評価については、2025年度の自己点検・評価の結果に基づき、内部質保証体制の適切性、教育・学習の状況、学生の受け入れ等を検証・評価するとともに、学生参画の取組等について意見交換を行った。中・長期的な観点から期待される点や、大学運営の改善に向けた課題について意見、提案を行うという方針で実施した。

総評として、成城大学の内部質保証に関する取り組みは、概ね適切であり、教育や学習、学生の受け入れについて、各ポリシーにしたがい適切に実施されている。

内部質保証に関しては、学長のリーダーシップのもとで、提言の提示と改善状況の把握が組織的に行われている点や、武蔵大学・甲南大学との相互評価、「内部質保証システムに関する組織図」の見直しなど、継続的に改善に対応する姿勢が高く評価できる。

教育・学習については、特色あるカリキュラムや取り組みについて確認された。今後は、アセスメントテスト結果の教学改善への活用、学修成果を可視化したうえでデータ活用する仕組みを内部質保証システムの中に位置付けるなど、データに基づく改善を強化する取り組みが期待される。

学生の受け入れに関しては、アドミッション・ポリシーの明確化や情報発信力の高い入試情報サイトが評価できる。一方で、各研究科では定員充足率の改善が課題である。また、入学者選抜時の対応を含め、合理的配慮や多様性配慮等の体制整備について、今後検討されることを期待したい。

学生参画については、教職学協働による多様なサポーター制度などの取り組みが充実しており高く評価できる。特に、ピアサポーターに対する育成研修は、学生個々の成長に大きく寄与すると期待できる。今後は、より高度な「学生参画」への発展を目指し、質保証における学生の役割を学内全体で共有するとともに、学生が主体的に大学運営に関わる文化の醸成と定着が望まれる。

本評価結果が、今後の成城大学の教育・研究活動及び管理運営等の改善・向上の一助となるよう、大学内の更なる運営改善に向けた検討、取り組みに役立てていただきたい。

(1) 2025年度 成城大学自己点検・評価結果(1. 内部質保証(大学基準 基準2))に対する外部評価委員の意見

大学の内部質保証体制の自己点検・評価結果について、以下の意見が提示された。

<長所・特色といえる事項>

- ・全学及び各部局に設置された自己点検・評価委員会が、毎年度自己点検・評価チェックシートに基づき点検・評価を実施している。その内容は、全学自己点検・評価委員会での確認と改善点の抽出を経て内部質保証委員会に報告され、最終的に学長から各部局へ「提言」がなされる。2024年度からは改善状況を詳細に把握・支援するため、『提言』に対する改善(取組)状況確認シート」を新たな仕組みとして導入しており、内部質保証システムに組み込まれた改善サイクルは、有効に機能していると評価できる。
- ・武蔵大学・甲南大学との継続的な相互評価を通じて、内部質保証の信頼性と妥当性を向上させている点は高く評価できる。
- ・貴学の内部質保証システムに組み込まれた改善サイクルにより、大学運営及び学生生活がより充実したものになっていくことが期待できる。

<課題>

- ・内部質保証システムの客観性や妥当性の担保については、その持続可能性という観点からも、組織内での健全な牽制を可能とするような体制が望ましいと考える。貴学固有の文脈や条件のもとで、内部質保証システムのあり方を検討いただきたい。
- ・非常勤講師を含むすべての教員が内部質保証の目的や仕組みを「自分事」として理解し、優れた取り組みや成果が全学的に共有されることで、組織全体としての改善・改革がさらに進展することを望む。

(2) 2025年度 成城大学自己点検・評価結果(2.(教育・学習(大学基準 基準4))に対する外部評価委員の意見

成城大学の教育・学習の自己点検・評価結果について、以下の意見が提示された。

<長所・特色といえる事項>

- ・各学部・研究科等で工夫に富む様々な検討がなされていることが確認できた。それ自体が質保証・質向上のプロセスだと捉えられることから、進行中の取り組みもエビデンスとともに自己点検・評価報告書に記載することで、学内における学位プログラムレベルのグッド・プラクティスの可視化や共有が一層進むものと思われる。
- ・「学生目線に立った大学づくり」を掲げている点に関連し、経済学部において2年次向けに新設された「基礎ゼミナール」のような取り組みがみられることは、学生の学修段階や不安に丁寧に寄り添う姿勢の表れであり、評価できる。このような取り組みは、在学生のみならず、受験生にとっても安心感につながる要素であると考えられる。
- ・「授業改善アンケート」で高い評価を得ている教員へのヒアリングをもとに作成する「授業カタログ」は、授業での工夫や優れた取組事例を収集し「見える化」するものである。効果的な授業方法を共有することにより、授業改善や効果的な履修指導につながることを期待でき、評価できる。
- ・カリキュラムマップやナンバリング作成以前から、履修の順次性に配慮したカリキュラム設計が行われていることが確認できた。

<課題>

- ・学生の汎用的能力を測定するためのアセスメントテストを活用しているが、その結果を具体的な教育内容・方法の改善へと結びつける体制の構築については、依然として課題として残されている。測定結果を点検・評価し、組織的な教学改善(PDCAサイクル)へと確実に結びつけるための仕組みづくりを期待したい。
- ・アセスメントテストについて、特に3年生の受検率向上に向けた工夫がなされている点がかがえる。今後は、自己分析や学修成果の把握にとって有益であることを引き続き粘り強く学生に伝えるとともに、その結果をキャリア形成や進路設計にどのように結びつけられるのか、具体的な活用イメージを示すことが重要である。こうした工夫を通じて、学生が主体的・積極的に受検し、学びを振り返る文化が一層定着することが望まれる。履修履歴とアセスメントテスト結果の相関性を分析することで、カリキュラム改善等の教育改革につなげることも検討できるのではないかと。
- ・内部質保証には、「質向上」と「質保証」の2つの要素が不可欠である。教育・学習が適切な水準にあることを自ら証明・説明する「質保証」の取組をさらに充実させるために、アセスメント・プランに基づく学修成果の可視化プロセスを、内部質保証システム内に明確に位置付けることが期待される。

(3) 2025年度 成城大学自己点検・評価結果 (3. 入学者選抜 (大学基準 基準5)) に対する外部 評価委員の意見

成城大学の入学者選抜の自己点検・評価結果について、以下の意見が提示された。

<長所・特色といえる事項>

- ・各研究科における定員充足率の向上については、現役の大学院生の協力を得て在校生向けの大学院説明会を開催したり、カリキュラム改革を検討されたりと、様々な取り組みが確認できた。今後の成果に期待したい。
- ・各学部・研究科のアドミッション・ポリシーについては、数年前から継続的な見直しが行われており、受験生（高校生等）にとって求められる資質・能力や水準が明確で、理解しやすい内容であることが評価できる。
- ・成城大学入試情報サイトは、大学の魅力を網羅的に掲載している。学生の生き生きとした学びや生活、課外活動の様子が効果的に発信されており、大学の魅力が適切に伝えられていることが評価できる。また、ハッシュタグ検索機能を備えるなど、オープンキャンパスに参加できなかった受験生に対しても、対面イベントと同等の質の高い情報提供を行っている点は高く評価できる。特に「成城の学びを知ろう！ースタディサーチ」は、大学での学びに興味を抱かせるコンテンツが充実している。この入試情報サイトは、結果として志願者の拡大につながる効果的な広報戦略であると評価できる。

<課題>

- ・収容定員に対する在籍学生数比率が低い大学院研究科（経済学研究科、法学研究科、社会イノベーション研究科）が見受けられるので、改善が望まれる。また、経済学研究科において、志願者数の確保及び定員充足率の改善に向け、「コース別人材育成の明確化」や「経済学専攻・経営学専攻の連携強化」を軸としたカリキュラム改革の検討が進められている。これらの改革に実効性を持たせることで、充足率が着実に改善することを強く期待する。
- ・合理的配慮や多様性への対応については、今後ますます重要性が高まることが予想されるため、貴学のバリアフリー委員会等を中心に、物理的・制度的・心理的な側面を含め、可能な範囲で組織的な準備や体制整備を進めていくことが望まれる。その際には、入学者選抜における合理的配慮に関する啓発活動の継続実施及び入学後の修学支援までを視野に入れた、一貫性のある「入学者選抜時の対応のデザイン」を構築することに留意されたい。また、多様な属性の交差的分析（インターセクショナルリティ分析）の視点を持ち、多様化する学生（受験生含む）の複数のアイデンティティや社会的な属性の交差について、組織全体で検討していただきたい。
- ・入学経路別に成績を分析した IR データは、入試方法の妥当性を検討するだけでなく、入学後の学習支援や履修アドバイスなどにも活用できるのではないかと。今後のさらなる IR データの活用が望まれる。

(4) 成城大学の学生参画に関する外部評価委員の意見

成城大学の学生参画の状況に関し、以下の意見交換が行われた。

<長所・特色といえる事項>

- ・成城大学では、ピアサポーター、キャリアサポーター、ライブラリーサポーター、データサイエンスサポーターなど多彩なサポーター制度を整備し、大学生活における学生参加の充実に努めている。特に、ピアチューター制度は、「教職学協働」の理念に基づいた高度な学習支援システムとしてデザインされており、当該制度において活動する学生への体系的な育成研修プログラムが個々の成長に大きく寄与すると期待でき、高く評価できる。

<今後、「学生参画」に望むこと>

- ・学生関与はすでに行われている。今後は、「学生と教職員が協働してプログラム評価を行う」「学生が学内の委員会に発言権を持って参画する」など、活動をさらに発展させる可能性についても検討が望まれる。なお、学部・研究科レベルの質保証・質向上において、学生の意見を丁寧に聴取し、その結果をフィードバックする取り組みは重要であるため、ぜひとも継続していただきたい。
- ・ピアチューター制度を軌道に乗せ成功させている成城大学においては、質保証活動における「学生参画」は、今後さらに発展していく可能性が高いと考えられるが、その意義が、教職員及び学生に理解・支持されるために、「学生は大学最大のステークホルダーであり、質保証活動の当事者である」という認識を周知・浸透させていくことが不可欠である。また、参画する学生をいかに募るか、さらに当該学生に対する研修の充実にについても、今後検討を進めていただきたい。
- ・近年、高校段階においても、生徒主体の行事運営の活発化、探究的な学びの普及、さらには大学入学者選抜の多様化を背景としたプロジェクト活動やボランティア活動への参加が進んでいる状況が見受けられる。そのような流れを踏まえ、今後も各種活動における学生の自治を一層推進するとともに、その姿を受験生に対してより積極的に発信していくことが重要である。加えて、オープンキャンパスに限らず、在学生が高校生と直接触れ合う機会を広げていくことは、大学の魅力を具体的に伝える有効な手段となり、結果として受験生の増加にもつながる可能性があると考えられる。
- ・学生参画のアプローチについては、評価者も作成にかかわった、大学基準協会「質保証における学生参画ガイドブック」も参考にいただければ幸いである。
- ・学生参画の推進に際し、支援する教職員の負担についても配慮する必要がある。もし、支援者の物理的・精神的な負荷が大きくなるようであれば、対応を検討していただきたい。
- ・生成 AI を利用する場合は、積極的な活用を通してアカデミック・リテラシーを涵養するアプローチを期待したい。

以 上